

「実録忠臣蔵」「雷電」

佐藤 忠男

映画評論家
日本映画学校校長

日本で最初の小さなガラスばりの映画スタジオが東京に出来たのが一九〇八（明治四一）年。この年に製作された日本映画は五四本、この年、まだ撮影所のない京都で、歌舞伎の小屋主だったマキノ省三は映画興行をやっていた横田商会からの依頼で、歌舞伎の演目のひとつの「本能寺合戦」を近くのお寺の境内を借りて自分の小屋に出演中の俳優たちで撮影した。これがきっかけでマキノ省三は映画製作にのめり込み、日本で最初の映画監督やプロデューサーたちのひとりとなった。そして一九二九年に亡くなるまでに約三〇〇本の映画を製作監督している。全てが時代劇である。

映画の作り方について教えてくれる人もおらず、はじめはただ舞台と同じ芝居を地面の上でやってそのまま撮るといふ原始的な段階から、トリック撮影を工夫して忍術映画で大当たりし、カメラワークや編集の仕方でも自分で工夫して映画の開拓者となったのである。大手の映画会社の日活に所属した時期もあるが、自分のプロダクションを主宰した時期が長く、そこではのち昭和時代の時代劇のスーパースターとなる俳優や優秀な監督、技術者の多くが育成された。だから彼は後年日本映画の父と呼ばれることが多い。厳密には京都の時代劇映画の父と言うべきであろうが、その存在の大きさには変わりはない。

最晩年の一九二八年に作られた「実録忠臣蔵」は彼のプロダクションの総力をあげて作られた大作であり、たんに日本映画の開拓者であるだけでなく指導者的な立場であり続けた自分にとってのひとつの記念碑的な作品とすべく取り組んだものだった。その熱意は配役の豪華さからもうかがわれる。主演スター級の俳優たちが惜しげもなく出場の少ない役に起用されていて、芝居に厚味と深味を加えている。

しかしこの作品は撮影を終って編集の段階で、不注意からフィルムの失火を引き越して多くの重要な場面が失われた。この打撃からマキノ省三は容易に立直れず、翌年「雷電」を撮るだけで亡くなった。

とはいえこの作品はすっかり失われたわけではなく、ある程度は残り、その部分だけ編集されて公開された。もちろん不完全な作品だが、この残った部分だけでも、日本映画の父と呼ばれた大監督、大プロデューサーのこの作品にかけた情熱の大きさは伝わってくる。今回のこのプリントは、このフィルムを発掘した映画界の松田春翠が、マキノ省三の息子のマキノ雅弘の監修の下で、マキノ雅弘が同じ配役で撮った作品の四十七士の討入りの場面を補って編集したものであり、映画史上、貴重な宝物のひとつである。